

第6回大会シンポジウム特集 「現代文学に見る多元文化性」

前 言

2016年7月9日（土）、早稲田大学多元文化学会は、早稲田大学文化構想学部多元文化論系・早稲田大学総合人文科学研究センター「グローバル化社会における多元文化の構築」部門との共催で、戸山キャンパス32号館128教室において、第6回大会を開催した。

第Ⅰ部総会、第Ⅱ部学生研究発表会に引き続き、第Ⅲ部ではシンポジウム「現代文学に見る多元文化性」を行った。

これまで、多元文化学会では、「多元文化」という言葉がどのような現象を指しているのか吟味することがなかった。今回のシンポジウムでは、表題の「多元文化性」という言葉の解釈も含め、異なる国の文化・文学を専門とする三人の教員が順に各々の立場から研究報告を行った。すなわち、小田島恒志「アメリカの現代戯曲とイギリスの現代戯曲」、高柳聡子「西欧在住の現代ロシア作家たち」、川浩二「現代地方演劇における新編歴史劇」の三者であり、小田島が司会も務めた。それぞれ、文学テキストの中に文化の多元性を見出していったのだが、題材の選択も、アプローチの仕方三者三様であった。小田島はこの年に東京で翻訳上演された（あるいは、これからされる）アメリカの戯曲『恥辱』とイギリスの戯曲『アルカディア』を取り上げ、前者では現代の「アメリカ的」なるものが民族文化、地域文化の混在する集合体であることを、後者では「イギリス的」なるものが、様々な文化の融合体であることを読み解いて見せた。高柳氏はロシアからドイツ（ベルリン）へ移住したイリヤー・チラーキの「インテンシヴ・レターズ」とロシアからオランダ（ロッテルダム）へ移住したマリーナ・パレイの「ランチ」を取り上げ、主に多言語的な表現の多様性に注目した。川氏は中国の地方演劇が地域に根ざした伝統演劇であり、同じ典拠の演劇上演が地域・時代でいかに独自性を帯びてくるか、『朱元璋斬婿』を例に、映像をまじえて考証した。報告後、フロアからの質疑応答も含めて現代に於ける多元文化性ということに関して考察を行った。

三人の発表を終えて、自由討論を行った際、今回、アメリカ、イギリス、ロシアについての発表では「多元文化的であること」とは、文化が遠心的に広がって、普遍的になっていくものであるととらえているのに対して、中国についての

発表では文化を偏在的なものととらえて、新しい文化を取り込んでいく際にそこに取り組む側の地域性が反映されていくととらえているという着眼点の違いが指摘された。発表者の関心や発表の題材によるのかもしれないが、興味深い発見であり、今後の「多元文化」に関する研究への課題となった。

(文責・小田島恒志)